

第10回30年後の医療の姿を考える会市民公開講座開催 『いのちの教育』

去る3月27日、東京・聖路加国際大学
アリス・C・セントジョンメモリアル
ホールにおいて、30年後の医療の姿を考
える会第10回市民公開講座「メデイカル
タウンの人生の連続性での『いのちの教
育』が開催された。同会は、医療介護従
事者や家族介護経験者などの有志により
2006年に発足。株式会社ケアーズ白
十字訪問看護ステーション統括所長の秋
山正子氏が会長を務める。

今回の講座の大きなテーマは「教育」。
基調講演では小林正弥氏（千葉大学大
学人文社会科学部研究科教授）が、「対話的
教育」の意味や方法、そのめざすところ
について語った。

「対話は学問や教育の原点である」

小林氏によると、「対話」は、違う考え
をもつ相手であっても話をよく聴き、意
見を述べ合うことで、互いの考えを深め
ていける可能性をもつという。

対話を用いた教育は、TV番組を通し
て日本にも広く知られるようになったが、
小林氏は「対話は学問や教育の原点であ
る」と考える。かつてソクラテスは、街
角で人々と問答（対話）をしながら真実
を探究した。現代の日本の教育において
も、教師が正しい答えや知識を学生に教

えるのではなく、対話を通じて自ら考え
るのを助けることが、進んで学ぶ姿勢、
ひいては自分で考えられる人間に導くこ
とになると述べた。

小林氏は、コミュニティにおいて人々
が「ともに」「善く生き
る」ことを重視した「コ
ミュニタリアニズム」を
提唱する。「ともに」とい
うことは、ケアの倫理で
もあるが、「善」に関する
価値観はさまざまである。

「どう療養して、どう生
活したいか。どう死にた
いか」という問いは、哲学
や思想の世界からも共感
する部分であり、また、
絶対の正解というものが
ない。だからこそ、「そ
れぞれが人生の旅の途中
であり、物語をもっている」という前提
に立ち、「善い生き方についての対話」が
家族やコミュニティにおいても必要では
ないかと呼びかけた。

教養ある看護の力を磨いていこう

次に、山田雅子氏（聖路加国際大学教
授、津村格氏（早稲田大学人間科学部、



山口育子氏（NPO法人ささえあい医療
人権センターCOML理事長）の3名が
登壇した。

在宅看護学の教育に長く携わる山田氏
は、看護実践力には教養が強く影響して
いると述べた。「教養がある」とは、聴く
力と話す力が調和している状態である
という。在宅看護は退院支援・調整から
関わることが多いが、それでは遅いと指
摘する。地域包括ケアの
視点からも、元気なうち
から「医療専門職が人生
設計の相談役になる必要
がある」と提案。「もつと
積極的に、その人の人生
を長い目でとらえ、今後
をすべきかを見出すこと
が教養ある看護の力。そ
こに磨きをかけていく必
要がある」と述べた。

現役大学生である津村
氏は、大学での福祉制度
の比較の課題をきっかけ
に、デンマークに興味を
もったという。そしてついに自身がデン
マークの国民学校（フォルケ・ホイス
コレ）に通うようになった。原則とし
て17歳以上の誰もが入学でき、期間は3
か月、半年、1年から選べるという。そ
こでは、映画撮影や音楽、ヨットなどの
授業も選択でき、楽しみながら興味のある
ことに取り組める場であったことを紹

介。「日本の教育に取り入れられたらいい
と思う点」として、授業やイベントの
企画のなかで、オープンに語り合い価値
観を共有し、課題に向かっていくスタイ
ルを挙げた。

人間性や感性を引き出していく

次に山口氏が、COMLの歩みを紹介。
1990年に発足した同団体は、患者と
医療者が協働でつくりあげるコミュニ
ケーションをめざし、相談や講演などの
活動をしてきた。その一環として、模
擬患者を利用した医療面接の、試験や評価
への導入を求めてきた。医師の臨床実習
前のOSCE（客観的臨床能力試験）は
05年に本格導入され、さらに改善される
予定だ。山口氏は、「確かな技術と丁寧な
説明があり、人間性が感じられる医療者
が増えるよう、患者の立場からも育てる
意識を」と呼びかけた。

パネルディスカッションでは、コ
ーディネーターとしてノンフィクション作
家の柳田邦男氏、秋田大学教授の中村順
子氏が加わった。「若者や子どもたちの
感性をどのように引き出すかは教育の大
きな課題であり、その地盤があつてこそ、
医学教育や看護教育が本当に意味のある
ものになっていくのでは」という柳田氏
の発言を皮切りに、熱い議論となり、盛
会のうちに幕を閉じた。

（写真／文 神保康子）